『源氏物語』の梗概の試み

――作品の時間性の定位をめざして――

渡辺仁史

緒言

言語作品には言の時間性（die Zeitlichkeit der Rede）[1]が内在すると考える。ここで論じる梗概とは言語作品の骨子となる結構であるが、言語作品の図式化された対象の把握以上に梗概では言の時間性の認識は欠かせない。本稿では言語作品における言の時間性を浮き彫りにするために、読解によって具象化される個別的な要素を作品自体から可能な限り切り離して保留し、筋の客観的様態の記述をめざす。その際、言語作品を位置づける文芸史との関係では作者という歴史社会的な束縛条件を逸脱しないこととする。

一

全体の俯瞰としての梗概にもすでに焦点化のあり方による作品理解の相違が窺える。梗概という作品の縮約による全体性の認識では記述の分量自体も意味を担うはずである。それゆえ『源氏物語』の私見梗概[2]（本稿末尾に掲載）では秋山虔の梗概[3]（約３６００字。それを踏襲し、私見梗概もほぼ同数の約３５００字とした。）での三部構成に対応するような文章の量（３：１：２）に近づくよう配分を試みた。また、選んだ登場人物の数も秋山梗概とほぼ同数である。ただし、秋山の梗概は比率としていわゆる第二部に多くを費やしており、その分だけ心の機微について多くを費やす第三部の登場人物の動向、思惟について十分言葉を割いてはいない。

三部構成説による『源氏物語』理解とは異なり、私見では平安貴族の情愛と死と仏道の物語という、凝縮されてはいるが一元化しえない非同時性を内包する主題を想定しており、三部構成説を前提としてのみ成り立つ王権論のようなものは含めていない。また、微視的権力を意識する言説という術語も位置、力、方向性をもつ点で一般的な言と異ならないと考え採用していない。併せてテクストという織物状の言語構造認識もテクスト間の連続性に議論が集中し、作品としての自己同一性を見失わせるものであり、主題概念を無効化しかねないと考え採用しなかった。

もとより秋山の説は主題性の発展を念頭に、池田亀鑑の三部構成説としての第一部光明と青春、第二部闘争と死、第三部死を超えるものという把握[4]を継承しており、さらに池田説を受けた玉上琢彌の昔物語的、運命悲劇的、性格悲劇的という物語の性格[5]、女性のために女性が書いた女性の世界の物語[6]という把握も視野に入っていると思われる。ただし、ここでは森岡常夫による三部構成説批判[7]にならって、作品という構成体を軽視し、その連続性を無視する便宜以上の分割は作品認識を歪めかねないという批判を提起しておく。私見梗概はあくまでも一作品としての『源氏物語』を前提としている。

作品の時間性としては出来事の先後関係も当然意味を持つので、秋山梗概の次の箇所のように、成立論の名残と思われる空蝉、夕顔や末摘花、玉鬘の物語の挿入の仕方等、物語要素の順序が前後するのは図式性に混乱をきたすので改めるべきであろう。

以上が第一部の概要であるが、この間、源氏と共有した罪を恐れつつ冷泉院を守り立てた藤壺や、明石の姫君の生母でありながら紫の上に姫君の養育を委ね、自らは卑下に徹した明石の君や、源氏との奇しき因縁に結ばれた空蝉・夕顔・末摘花など、また夕顔の遺児で源氏の愛の対象となり心を砕きつつも鬚黒大将の妻となった玉鬘、幼い恋仲をさかれたものの、ついには結ばれる夕霧と頭中将の娘雲居雁など、その他さまざまの人生が複雑に織りこまれながら、前記の

ごとき源氏の栄華の完成の過程が構成されている。（秋山虔「梗概1」）

また、たとえば「密通」は「逢瀬」とする、など私見では叙述が著しく現代的な言葉にならないよう、あるいは作品の雰囲気を損ねないよう配慮した。

さらに、作品中の鍵語も導入し、意味の深みを追求できるようにし、より作品の時間性に沿うよう配慮した。たとえば「後見」は単独の意味野ではわからないが、「いづれの御時にか、女御・更衣、あまたさぶらひ給ひける」という時代的刻印とつきあわせると、更衣の状況について「とりたてて、はかばかしき後見しなければ」が作者による歴史的解釈であり、そこには重なりながらも相互に牽引する二つの時間の間にどちらにも属さない時間性を見て取ることができる。その意味で作品には言による固有の時間の刻印がある。更衣が多くいた村上帝以前の后妃のあり方と、漢文日記等を含めた現存する資料によれば『うつほ物語』以降あらわれると考えられる「後見」[8]の言語認識との間に時代的齟齬が見られる[9]。それはとりもなおさず既存と未定との間の亀裂としての、言による虚構の時間性が定位される場である。単なる不定の先後関係のみで作品が成立しているわけではなく、作品という対象と読者との距離も基準となる独立した時間性の認識なしでは測定できない。ただし、このように言語分節化されにくい領域としての意味の深みへ向かうのは読解の不可逆的追求であり、読者が作品の継起性に再び沿うのに支障をきたすことがある。一度その解釈過程に入り込むと先入見を払拭し再び素朴な読者に戻るのは難しい。

二

作品に内在する解釈指標の集合（内包された読者（der implizite Leser）[10]という概念は「読者」という語が実体化されかねないので本稿では採用しない。）に導かれ無規定箇所（Unbestimmtheitsstelle）[11]を具象化する実体としての読者の解釈には精粗の差がある。曖昧な記憶から筋、細部から展望・記憶へとめぐる過程で細部の意味の深みに気づくことは多い。研究者が各自の研究の進展に従って粗筋中心の観点から次第に局面中心の研究に近づくことが頻繁に見られるのもその証左である。

参照系とは作品が位置する時代の通念であるが、他の作品の直接的影響とともに、読解に関わる背景的要素を網羅的に調べながら読み進めようとすると時間に即して展開する筋を追えなくなり、読書行為は頓挫する。一方、創作者もまた参照系にこだわるほど背景的知識の精密化に固執せざるをえなくなる。外的時間でいえば創作の時間と享受の時間の長さが異なるのと同じく、読解の時間自体もいわゆる時間芸術である楽曲の演奏同様、個人差があるのは当然であるし、読解の中断、遡及なども考慮すべき場合がある[12]。また、作品の時間性の存在に関しては少なくともすべての音符、言を同時に鳴らせば、あるいは意味化すれば作品は無意味となることを考慮せずにはいられない。凝縮されてはいるが作品を展望する直観にとってさえ時間性という契機を除外することはできないのである。

作品読解にとって有効な解釈指標である作中人物形象についても、それが描かれた思惟である限り作品の一部であるが、作中人物の思惟にこだわるあまり作中人物を実体化させるのは、人物形象という、読解の進展に伴い集積されてゆく束縛条件を作品内での自律的展開と錯覚する誤謬に陥ることになる。また、作中人物は実体的存在ではないために、作中人物の描かれていない内面を推測するのは当然ながら適切ではない。それらの前提に立って、作中人物の近代的把握は措くが、秋山虔『源氏物語』（岩波新書）[13]の秀抜な叙述をも参照した。

作品展開における出来事の先後にともなう継起性と散在、並びに時間的基準点（時系列と因果関係だけでなく絶対的な歴史的位置を含む。）の布置の記述は、作品の様式（たとえば「渾融的」あるいは「純美的」「直観的」「抒情的」という認識[14]）には還元できない。また、構造主義言語学の共時的観点に基づく語の選択（Selektion）と結合（Kombination）という機構[15]では把握しきれない言の時間性（線状性、回帰性、不定性、重層性等）が存在することも確認しておきたい。その意味で、作品は音と語の二重分節の統合からなる図式化された対象にとどまらない、より高次の構成体であると考えられる。すなわち図式化された対象の層を実在する個の読者が縦断する読書行為の過程とは別に、作品の文章構成（Komposition）[16]は図式化された対象の層に還元できない時間性を担っているのである。

結語

様々な要素からなる文芸事象[17]を究明する上で言語作品を具象化された要素から一先ず分離し、言語作品自体（特にその時間性）とはどのようなものかを記述・分析することが理論的考察のために必要とされている。本稿の私見梗概は作品の骨子を壊さない範囲で可能な限り言語作品を凝縮し、それでもなお無視しえない言語作品の時間性を記述の観点とともに具体的に提示する試みである。

『源氏物語』の本文は山岸徳平校注『源氏物語』（一）岩波文庫　昭和４０・６　に拠った。ただし、一部解釈、表記を改めた。

注

（１）渡辺仁史「文芸史記述の方法」『文芸史の可能性――平安文芸史新攷――』新典社　平成２４・８

（２）私見梗概は渡辺仁史「『源氏物語』小事典」『一関工業高等専門学校研究紀要』第３３号　平成１０・１２　を改訂した。

（３）秋山虔「梗概」１・２　秋山虔編『源氏物語事典』学燈社　平成元・５

（４）池田亀鑑「源氏物語の構成」『新講源氏物語』至文堂　昭和２６・２

（５）玉上琢彌『物語文学』塙書房　昭和３５・７

（６）玉上琢彌「女のために女が書いた女の世界の物語」『国文学解釈と鑑賞』昭和３６・５

（７）森岡常夫「源氏物語三部構成説批判」『文芸研究』昭和４０・２

（８）たとえば「この御後見したまふと思してこそは。」「国譲」中巻の例がある。中野幸一校注・訳　新編日本古典文学全集『うつほ物語』③　小学館　平成１４・８　中野幸一『うつほ物語の研究』武蔵野書院　昭和５６・３　は『うつほ物語』の成立の上限を円融帝の時代とする。本稿はその説に従う。なお、「後見」の用例については峰岸明『平安時代記録語集成』上・下　吉川弘文館　平成２８・８　築島裕他編『古語大鑑』第１巻　東京大学出版会　平成２３・１２　も参照した。

（９）渡辺仁史「光君の呼称」注２『平安文芸史攷』新典社　平成１３・５

（１０）Iser, Wolfgang. *Der Akt des Lesens*. München :W.Fink, 1990（初版は１９７６年）邦訳　W・イーザー『行為としての読書――美的作用の理論――』轡田収訳　岩波書店　昭和５７・３

（１１）Ingarden, Roman. *Das literarische Kunstwerk*. Tübingen :Max Niemeyer, 1972（初版は１９３１年）邦訳　R・インガルデン『文学的芸術作品』瀧内槇雄・細井雄介訳　勁草書房　昭５７・１２（ただし第三版）

（１２）たとえばベートーヴェン作曲　交響曲第６番作品６８〈田園〉の演奏時間はフルトヴェングラー指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団演奏１９５２年　では約４５分、カラヤン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団演奏　１９６２年　では約３６分と大きな差があり、聴覚的印象も異なる。

（１３）秋山虔『源氏物語』岩波書店　昭和４３・１

（１４）岡崎義恵「文芸の日本的様式――様式論と史学との関係――」『日本文芸学新論』宝文館　昭和３６・７（原題「日本文学の様式」岩波講座・日本文学史　第十六巻　岩波書店　昭和３４・１　ただし「文芸の日本的様式」では「序」は削除されている。）

（１５）（１０）に同じ。

（１６）（１１）に同じ。

（１７）渡辺仁史「文芸史の可能性――平安文芸史新攷――』新典社　平成２４・８

『源氏物語』梗概

光君は、時の帝と多くの女御・更衣の中でも頼れる「後見」のいない身分の低い**桐壺更衣**との深い愛情の中で生を受けた、光るように美しい御子であった。しかし、他を顧みない帝の寵愛のゆえに周囲の嫉妬を受け、桐壺更衣は病の末に死去し、帝の恨みは尽きない。一方、政治的安定に欠かせない後見をもたない光君も東宮にはなし難いがゆえに、帝は熟慮の末、予言に従ってこの君を臣籍に下して源氏を名乗らせる。**光源氏**とはそうして呼ばれるようになった呼称である。

光君はたぐいまれな血統・容貌・資質によってやがて多数の女性と恋に落ちるが、幼い光君が最も引きつけられたのは母更衣に容貌のよく似た年若い継母、**藤壺宮**であった。しかし、その人が父帝の后妃であるため、元服以降、直接まみえることはかなわぬこととなる。光君は元服とともに時の**左大臣**の娘である**葵上**と結婚するこ

とになったが、誇り高く四歳年長の葵上とは折り合わない。そこに以前からの藤壺宮への禁忌の思慕も加わって、満たされぬ心をもてあまし、多彩な恋へと乗り出してゆく。

物語では光君について遠い視点から語り始められ、やがて真面目な「本性」とあやにくな恋を求める「癖」が交叉する光君の行動が、自在な視点から時に詳細に、また時に描かれない部分までも暗示するように奥行きをもたせて語られる。気高い**朝顔姫君**、身分違いの**空蝉**、もののけのために急逝する**夕顔**、気品ある年上の**六条御息所**、古めかしい**末摘花**などとの恋とともに、藤壺宮とのひそかな逢瀬があり、その結果として後の**冷泉帝**が生まれることになり、光君は藤壺宮とともに苦悩する。光君はそれとほぼ同時に、病を癒すために出向いた京の郊外北山で藤壺宮によく似た姪である「紫のゆかり」、利発で愛らしい**紫上**を「垣間見」て、自邸に強引に引き取り理想の女性に育ててゆく。

華やかに紅葉賀や花宴が行われ、光君の対立勢力である**弘徽殿女御**の妹、**朧月夜君**と光君とのあやにくな出会いがある。しかし、帝が退位し、弘徽殿女御との間に生まれた兄、**朱雀帝**が即位するとその弟、光君は次第に政治的圧迫を受けるようになってゆく。また、葵上と六条御息所の葵祭での車争いがあり、それが六条御息所をもののけとさせ、葵上はそれに苦しむ。葵上は男子**夕霧**を出産するが、まもなく死去し、光君は無常を知らされ仏道へ心が傾く。しかし、なお現世の「ほだし」を思い捨てることはできなかった。

敵方の女性、朧月夜君との密会はやがて知られるところとなり、光君は朱雀帝に対する逆心のなさを示すために須磨へ赴くことを決意する。政治的には無実を念じつつ、一方で継母、藤壺宮との関係に罪の意識を抱き、光君は須磨で謹慎の生活を送る。しかし、一年後暴風に襲われた折、父帝の霊夢に誘われるまま、夢告を受けた**明石入道**に導かれて明石の地に移ることになる。光君が明石入道の願いでその娘の**明石御方**と契りを結んだ結果、後の**明石中宮**が生まれる。

京には天変が相次ぎ、一年後、弘徽殿女御方の政治的衰退によって光君は帰京する。藤壺宮との秘密の子、冷泉帝の即位とともに光君は政権の中心となり、栄華への道を歩み始める。そして六条御息所の娘、後の**秋好中宮**を養女として入内させ、盛時を誇るように学問技芸等を競い、かつての盟友、左大臣家の**頭中将**などを政治的に圧倒する。さらに藤壺宮の死去を契機に真実を知った冷泉帝は、実父光君へ帝の位を譲位するむねほのめかすが、その意向を光君は拒み通す。藤壺宮喪失の悲嘆の後、朝顔姫君とのしばしの交流を経て、光君は四季を調和させた壮麗な六条院を造営し、そこに「らうらうじ」き紫上・秋好中宮・「身の程」をわきまえる明石御方・「おいらか」な**花散里**といった女性たちとともに住まう。

加えて光君は偶然に夕顔の遺児**玉鬘**をも引き取ることになり、玉鬘に求婚する公達に加え、演出者であったはずの光君さえも恋の虜となりつつ、季節の緩やかな推移とともに求婚物語が繰り広げられる。頭中将の娘、玉鬘を粗野なふるまいで失笑をかう同じく娘の**近江君**と時に対比させつつ、六条院でのみやびな営みが描かれるのである。そうした営みのさなか、いつしか光君にも過分な栄華への恐れが生じ、老いが忍び寄る。意外にも玉鬘は無骨な**髭黒大将**の妻となり、一方で実直な夕霧は頭中将の娘**雲居雁**との引き裂かれた幼い恋をやがて実らせ、幸福な結末を迎える。光君自身も予言に沿うように准太上天皇となるが、それは無常の世におけるしばしの栄華の頂点であった。

その頃、病を患っていた朱雀院は、出家に際して最愛の年若い皇女、**女三宮**の後見の選定を思い迷う。思案の末、周囲の勧めもあって院は若い多くの候補者をよそに、光君に委ねることを決意する。女三宮は故藤壺宮の姪、紫のゆかりでもあり、四十歳の若菜の賀宴をひかえた光君も後見を兼ねて女三宮の降嫁を引き受ける。そのことで光君の最愛の妻、紫上は衝撃を受けるが、その深慮により光君たちとの和を図る。賀宴が盛大に営まれ、また紫上が養育した明石中宮が男子を生んだため光君一族の安泰も確実となるが、一方で紫上は孤独、老いの意識から出家の意向をほのめかす。やがて紫上は病にかかり、光君が看病におもむいている隙に、蹴鞠の折に垣間見た女三宮を忘れられない頭中将の子息**柏木**が強引に女三宮と通じる。それは光君の知るところとなり、女三宮は柏木の子である**薫**を生んで出家し、柏木もまた光君に怯えて死去する。六条御息所の死霊さえも現れ六条院は混乱を極めるが、誕生した薫を実子として抱きあげる光君は、女三宮と柏木の密事をかつての自身の罪の応報として受けとめざるをえなかった。

一方で柏木に後事を託された夕霧は未亡人**落葉宮**を恋慕し、落葉宮の苦悩をよそに一方的に思いを遂げる。やがて紫上も光君からの出家の許しを得られないまま死去し、光君はこの世の無常を深く思い知らされる。執着する事柄をすべて見果てた光君は紫上を追慕しながら一年を過ごし、栄華と憂愁に満ちた自己の生涯を顧みて、出家に備えるのであった。

光君の没後、その生を一面で受け継いだのは光君の孫で「花心」の**匂宮**と「聖心」

の薫であった。光君の子として育てられた薫は幼い時から自己の出生に疑念を抱き、仏道へ心を傾けていた。六条院が次第にもの寂しくなる中で、玉鬘等の光君にまつわる人々のその後の変転が語られた後、舞台は京を離れ、仏教的雰囲気をただよわせる宇治に移る。そこには光君の異母弟で、今は零落し、仏道に勤しむばかりの「俗聖」**宇治八宮**が娘の**大君**、**中君**とともに隠棲していた。

薫は宇治の山里に住まう、世を厭う「法の友」八宮のもとに通ううちに、ふとした垣間見がもとで大君に親交を超えた思慕を抱くようになる。一方の大君は、極楽往生を願っていた宇治八宮亡き後、軽々しく山里を出ることなく生涯を宇治で過ごすようにという宇治八宮の遺志をかたくなに守ろうとし、後見のない自己の境遇を顧みて、自身よりも中君を薫に結びつけようと願うのであった。しかし案に相違し、薫のはからいによって中君は匂宮と結ばれてしまう。一方で匂宮は権勢家である夕霧の娘にも婿取られ、匂宮と中君との関係に心を痛める大君は思いつめ、薫との俗世のつながりをかたくななまでに拒みつつ、心労の果てにわびしく死去する。

故大君追慕のゆえにやがて薫に思慕されるようになる中君であるが、自身の匂宮の妻としての立場を懸命に守りつつ、自身の代わりとして大君の面影を宿す異母妹で、東国から上京したばかりの**浮舟**を薫に引き合わせる。しかし、偶然に浮舟を知った匂宮がそこに関わり、再び恋の関係に乱れが生じる。薫は浮舟を宇治に隠し据えるが、浮舟の所在を知った匂宮は女房たちの手引きで浮舟と夢のようなひとときを過ごす。一方の薫もそれに気づき匂宮を浮舟に近づけまいとする。匂宮の情熱と薫の篤実さという二人の対照的な情愛の間で進退に窮した浮舟は、災いを流すための「人形」としての不吉な定めに従うかのように宇治川に身を投げようとする。

意識を失っていたところを通りかかった高徳の**横川僧都**に救われ、小野の妹尼等に介抱されたものの、浮舟は俗世との関わりを厭い続け、やがて横川僧都に願い出て出家する。一方、浮舟失踪後の喪失感の中、浮舟存命の噂を京で偶然聞いた薫は僧都と面会し、経緯を打ち明ける。それを知った僧都は薫の要請に応えて浮舟の弟を使者として消息を送るが、浮舟は悲傷の中でかたくなにその受け取りを拒む。もはや母の情愛以外には浮舟は何ものも信じられない。めざした「聖」への道からは女君達と関わるごとに遠ざかり、浮舟の心も測りかねて一人俗世にとり残される薫を描き、物語は解決を見ぬままに終焉する。

（二〇一八年九月六日受理）